



ばあばのところ

「今日は、ばあばのところまで寝るね」

最近よく耳にする七歳の長女と次女の一言です。いつの間にか子は成長し、親が側にいなくても「お泊まり」できるほどになりました。本当はゆっくり、静かに眠りたいだろうに。私からすれば母である「ばあば」には、世話を押しつけるようにで申し訳ないなと思いつつも、「ばあばのところ」でも安心して一夜を過ごし、眠りにつく子ども達の姿は、私にも同じような過去の良き思い出があるからか、とても嬉しいことなのです。

「ばあばのところ」は子ども達にとつて安心できる場所です。また、親とは違ったことで褒めてくれたり、ときに甘

えることができたりと、子どもなりに喜びを感じる場所でもあるのでしょう。

一本の廊下でつながった、「ばあばのところ」に一日に何度も行き来する娘たち姿は、私の過去の記憶、祖母の文子おばあちゃんとの懐かしい思い出を振り返らせてくれました。

私の幼き頃「祖母のところまで寝る」とは、小学生の半ばから始まり中学校の半ばまで、ほとんど毎日のように続く日常の一コマでした。祖母の横に布団を並べて、明かりを暗くし眠りにつくまえ、いつもやさしく語りかけてくれました。どんな喜びも悲しみも、やさしく受けとめてくれる文子おばあちゃんが私は大好きでした。そんな祖母と一緒に寝る日々は、亡くなるその日まで続きました。

母から叱られたとき、姉たちとケンカしたとき、お菓子を食べたくなったとき、お小遣いがほしいとき、一日に何度も祖母のところに行きました。

いつもやさしい祖母でしたが、ごくたまに厳しく叱ることもありました。今でも忘れられない思い出があります。

たしか、私が友達か姉たちへの悪口を言い、人を悲しませるような汚い言葉を使っていたのだと思います。祖母は「人への悪口を言っているときの自分の顔を見てみなさい。あなたのほうがよっぽど鬼みたいな顔や心になってるよ。」祖母はいつもの「私の味方」ではなく、逆に厳しく叱りつけました。なぜだか悔しくて、祖母にまで悪口をいってしまった。た。いつもやさしい祖母から叱られた、その一連の出来事は、大人となった今も、大切な思い出として胸に残っています。過去の私と同じように、ばあばに甘える娘たちを見ながら、

「ばあばのところまで過ごす、今この時間が、人生の宝物といえるような思い出になってほしいな」と願うのです。